

# 入学式告辞

今日、晴れて入学の日を迎えられた皆さんに、名古屋外国語大学を代表して心からお祝いを申し上げます。また、今日、本学にお越しくださいました保護者の皆さまにも、心より改めて御礼を申し上げます。

さて、今日から皆さんの新しい学び舎となる名古屋外国語大学は、来たる二〇一八年に創立三十年の記念すべき年を迎えます。「三十にして立つ（而立）」という『論語』の言葉を「存じ」でしょう。名古屋外国語大学は、今まさに長い成長期を終えて、いよいよ本格的な自立の時代を迎えつつあるのです。そしてその一つの大きな結実が、この四月の世界共生学部世界共生学科の誕生です。

約三〇年間にわたる、この変化に富んだ成長期のなかで、私たちの大学は、中部地区唯一の外国語大学としての高い評価を得ることができました。今後も、この勢いを継続させ、その存在をさらに広く全国に向けて周知させるべく弛まず努力を重ねていく所存です。しかし、大切なのは、むしろ大学の成長、大学の「而立」だけではありません。何よりも、本学に学ぶ学生たち一人ひとりの成長と「自立」を促し、それを現実のものとするところこそが、私たちに課せられた使命です。その使命の自覚という点で、新入生である皆さんに寄せる期待は、ここによると、皆さんの想像をはるかに超えるものがあるかもしれません。学長として、学部、学科を問わず、皆さんに寄せる期待は同じです。それは、日本のみならず、世界の人々から、「さすが MEIGALDAI」とリスペクトされる人間に育ってほしいということ……。その切なる願いを込め、今日はこれから、私が最近考えていることを紹介したいと思います。ただし、そこで伝えたいと願っているメッセージは、次の二つ。

## 一、嘘を避けること 一、謙虚さを心掛けること

おそらく皆さんは、現在は好景気に支えられている日本の今後の行く末に、いくばくかの不安を感じておられるにちがいません。AI（人工知能）に象徴される科学技術の圧倒的な進歩によって、人間に与えられる仕事の幅がどんどん少なくなっていく現実への不安、少子化によって日本の国力が否応なく衰退していくことへの不安、さらにより巨視的レベルでは、グローバル化の流れと軌を一にして広がる世界的な政情不安などです。

それらの不安のなかで、私がとくに深く懸念しているのが、インターネット、携帯電話の普及との関連で生じつつある人間、社会、政治その他あらゆる面でのモラルの低下です。とりわけ、社会、政治でのモラルの低下は目を覆うものがあります。ご存じのように、グローバル化の荒波を生き抜くため、今や世界の国々は、なりふりかまわず自己防衛に走ろうとしています。同時に、社会の二極化が進むなかで、それぞれの地域で悪しき排外主義が台頭し、強者が弱者をないがしろにする風潮が、あたかも新しいモラルの基準と化しつつあるかの印象さえ受けるほどです。

そんな状況を横目でにらみながら、私は最近、子どもの頃に読んだイソップ童話「オオカミ少年」の話をなぜかしきりに思い浮かべるのです。

村はずれの牧場で過ごす羊飼いの少年が、退屈しのぎに「狼が来た」と叫んで大騒ぎを引き起こします。村人たちは、それぞれ棒を携えて駆けつけて来ますが、どこにも狼は見当たりません。村人たちの慌てぶりを見て愉快に感じた少年は、翌日もまた「狼が来た」と叫びます。村人たちはまた駆けつけて来ますが、やがて少年の「叫び声」を信じなくなりません。そんなある日、本当に狼がやって来ます。少年は「狼が来た」と必死で叫びますが、もはやだれひとり駆けつけるものもなく、その結果、村の羊がすべて狼に食い殺されてしまうというお話です。ちなみに、明治時代に作られた教科書には、このイソップ童話とは別に、嘘をついた少年が狼に食べられるという話が掲載されたと聞きます。ここで問題となるのは、殺された羊に意味されていたものとは何なのか、ということなのです。ほかでもありません。それは真実です。そして、この羊飼いの嘘によって、共同体全体が崩壊の危機にさらされる。

まだ小学校に入ってもない時期にこの話を読んだ私は、嘘をつくことの恐ろしさを、子ども心に強烈に感じた記憶があります。問題なのは、このオオカミ少年の心にきざしている、何かしら病的な影。そしてこの一種「愉快犯」ともとれる影が、じつは、私たちの社会全体を覆いはじめ、しかもそれが、たんなる嘘のレベルを超えて、悪意や憎しみをはらみはじめている事実です。

最近、大きな社会問題となっている「ヘイトスピーチ」もその一つです。人種、国籍、思想、性別、職業、外見など、個人または集団が抱える「弱点」を故意に貶め、しかも、他人を扇動して、そうした差別を助長しようとする。

思うに、ヘイトスピーチに見られるのは、根拠のない自信を振りまき、できるだけ自分を大きく見せよう、自分を優位に立たせようとする偽りの心情です。そしてそこに決定的に欠けているものこそ、批判的な思考力なのです。すなわち、自分を批判的に見つめる努力――。

私がそう感じるから真実だ――。ここに、大きな間違いの原因が潜みます。

私たち人間にとって何かを感じることは、それ自体とても大切なことです。なぜなら、知覚し、感覚することこそ、人間としても重要な要素かつ基本的な営みの一つなのですから。しかしその「感じる」力が、たとえどれほど自分にとって切実な意味をもとうとも、やはりそれをしっかりと対象化するまなざしが欠かせません。「私がそう感じるから真実だ」という考え方は、じつは、たんに批判的な思考力の欠如だけでなく、より根本的に、他者に対する共感力の欠落をも意味するものとなります。なぜなら、その考え方は、相手の心の奥をおもんばかることなく、相手を過度に単純化することから生まれるからです。真の共感力とは、同情とは異なります。一方的な同情は、しばしば、「私がそう感じるから真実だ」と同じ落とし穴をはらみます。

さて、最近、よく耳にする言葉に「ポスト真実時代」という言葉があります。インターネットによる情報の氾濫のなかで、真実と嘘、事実とフィクションの見極めがつかなくなった現代の状況を表す言葉です。「ポスト真実時代」は、また、許されうるぎりぎりの範囲で嘘をつくこともよしとする風潮を示唆しています。

このような時代は、もはやたんに他者に共感する力だけではサバイバルできません。なぜなら高い共感力というのは、往々にして嘘に同化してしまう危険性をはらむからです。ですから、真の共感力の持ち主であるためには、真実と嘘を、事実とフィクションをしっかりと見極める力が求められてくるのです。それこそが、先ほども述べた批判的な思考力。まさにそこに、ほんものの知性と教養は宿ります。

本学が、海外での学びを大切と考え、これを奨励する理由の一つは、私の考えによれば、それが、自分の「小ささ」を知る貴重な機会だからです。言いかえると、自分の帰属する社会を絶対視できない弱い立場を経験できる。異なる社会、異なる文化にあつては、真実と嘘を見極める力こそが身の安全を守る唯一の力となります。さらに外国での学びと国内での学びが一つに結び合わさることで、人はじめて「共生」することの何たるかを知り、その本質に通じることができるようになります。

一方においては、弱者の立場から、他方においては、多少、語弊はあるでしょうが、強き者、ある一定のアドバンテージを得ている者の立場から。今日の告辞の冒頭で、私は、私たちの大学の成長期における一つの大きな結実として、世界共生学部の誕生がある、と申しました。しかし「世界共生」は、けつして世界共生学部だけが掲げる目標ではありません。それは、私たち、外国語の学びを原点とする大学全体の目標でもあります。生物学の定義で「共生」は、「異なる種類の生物が、互いに相手の足りない点を補い合いながら、生活する現象」とされています。両者の関係は、基本的にイーブンです。むしろ、そうした調和的、平和的「共生」関係にも、互いの利害をめぐる緊張関係が存在することは否定できません。しかし、出発点は、あくまで「足りない点を補い合う」精神が礎とならなくてはなりません。「共生」はけつして、自己満足や慈善のために叫ばれているわけではないのです。言語、文化、宗教を超え、お互いが、それぞれに幸福な人生を生きるために「共生」が求められているのです。

ですから、どうか、世界のさまざまな地域に生きる人々との「共生」や「協働」を模索するとき、けつして優位者の意識に立たないように心掛けてください。嘘で自分を飾らないように。もし自分にほんとうに優れた力があると感ずることができたなら、それをけつして驕ることなく、逆にどこまでも謙虚であらうと心掛けてください。私の考えでは、嘘のない、謙虚な人に勝る美しさは存在しません。謙虚さは、その人の美しさに、何倍も輝きを添えるものです。それは、国境を越えて生きる真実であり、世界の人々から、「さすが MEIGALDAI」とリスペクトされるための基本条件でもあるのです。

さて、私たち名古屋外国語大学のキャンパスは、日進の小高い丘の上に立っています。お隣りでは、私たちの姉妹校NUAS（名古屋学芸大学）の学生たちが学んでいます。今日から四年間、NUFS（名古屋外国語大学）のみならず、お隣りのNUASの学生たちとも切磋琢磨し合いながら、充実した学生生活を送ってください。そして最後に、胸に刻んでおいてほしいことが一つ。今日のこの日から、名古屋外国語大学は、皆さんの人生にとって、かけがえのない記憶の道連れとなるということ。皆さんのこれからの努力と将来における活躍によって、私たちの大学NUFSそれ自体の輝きと未来もまた、日々、更新されるということ、私たち教職員一同も、そのことを胸に刻み、皆さんのよりよい学生生活のために全力を尽くす所存です。

以上をもって、学長の告辞といたします。

二〇一七年四月一日

名古屋外国語大学長

亀山 郁夫